

自由研究 創作小説

3年C組30番 堀内彩羽

題名

あの日起きた出来事

テーマ

広島の前爆

時代背景

昔（一九四五年八月）、現代

登場人物

・一色千代

昔

廉と同じ家系、文の友達、渉の東京友達

元気、ポジティブ

前まで、東京で暮らしていた

・一色廉

現代

千代と同じ家系

クール、冷静、根は優しい

いろいろなことが重なり、不登校になる

・久遠文

昔

千代の友達

おとなしい

・月島渉

昔

千代の東京友達

優しい

構成

・始め(千代視点、昔)

仕事を終え、帰る途中の千代と文。急に目が開けられないほど周りが光る。
目の前に、タイムスリップした廉がいる。

×モ 渉についての会話を入れる。

・中一(千代視点、昔)

廉が目の前にいて、混乱する。文が、廉が幽霊だと気づく。廉がタイムスリップしたことに気づく廉と千代が離れられないことに気付く。一緒に過ごすことになる。

×モ 人に触れないきっかけを作る。スマホ、服などの違いがきっかけで気付くようにする。

・中二(千代視点、昔の八月五日)

廉と千代が喧嘩しながらも楽しく生活する。廉が千代に不登校、親、苗字などのことを話す。解決していつも通りになる。

×モ 学びたくても学べない状況だという話を入れる。

・中三(廉視点、昔の八月六日)

千代達がいつも通り仕事に行く。途中、タイムスリップした時と同じような感じで光る。目を開けると、原爆が落ちた後の地獄のような光景が広がる。千代に伝えたいことを伝え終えると周りが光り、元の時代に戻る。

×モ 修学旅行で学んだことを入れる。(峠三吉の詩など)

・終わり(廉視点、現代)

病院のベッドで目が覚める。今までの行いを謝り、何があったのか素直に打ち明ける。タイムスリップしたことは覚えていない。原爆に興味を持つようになる。

×モ 原爆についての文を少し入れる。

×モ

・戦時中の中高生の仕事・・・農業、家事、防空壕作り、兵器の製造(学びたくても学べない)

・建物疎開・・・火災が周辺に広がるのを防ぐために、あらかじめ建物を壊して防火地帯を作ること

・二〇二四年三月末時点の被爆者の数は、全国で約一〇万六八〇〇人

工夫した点

・少しでも昔らしさを出すために、人物の名前を古風にしたり、昔を生きていた人物がカタカナ言葉を使わないようにしたりした。

・修学旅行で学んだことを取り入れた。

・広島弁を意識した。

・最後に、原爆について書いた。

苦心した点

・最初書いた時に昔らしさを感じられず、どうしたら今風ではなくなるのが難しかった。

・広島弁を知らないなので、広島弁を勉強し、標準語から直すのが大変だった。

・読み直す度に変なところを見つけて、書き直したり、構成を変えたりして大変だった。

・普段使っている言葉を変換して書くのが難しかった。

・頭でイメージしている物語を言語化するのが大変だった。

あの日起きた出来事

「はあ、この仕事大変じゃのお。」

「千代（ちよ）、帰ろう！」

今は一九四五年七月最終日。場所は広島。うちら中学生は、戦争に戦う武器を作るお手伝いをしている。

「あーあ、広島も良いところじゃけど、東京が恋しいな……。」

うちゃ去年、東京から広島に引っ越してきた。広島に引っ越してきて不安じやったけど、クラスメイトはみんな優しく面白だし、うちとは真反対のおとなしい性格の文（あや）ともとても仲良くなれて、もう完全に広島弁になったし、あつという間に溶け込むことができた。だけど、やっぱり東京に戻りたいな……。それに……

「あはは、またそんなこと言うてる。東京も恋しいんじやろうけど、本当は渉（わたる）くんが恋しいんじやろ？」

「あ、文!? 渉だけじゃないけえ！」

「渉くんだけじゃないってこたあ、渉くんのこと恋しいんじやろ？」

「うう……。」

渉とは、広島に引っ越す前の仲が良かった男友達。引っ越す前に、渉にこんなを言われた。

「絶対また帰ってきてな。その時に、会って、伝えたいことがある。」

うちゃこれを言われてからというもの、以前よりも渉のことを無意識に考えてしまうようになった。

「文って、恋愛のことになると人格変わるよね。」

「そう？」

文とたわいもない会話をしながら帰っていた時。急に強い光がこちらの目に差し込んできた。光が強すぎて、目も開けられないほど。

「きゃー！」

「何!？」

文と二人、手を取り合うてその場にしゃがみ込む。一瞬でその光は治り、恐る恐る目を開けた。すると……

「え……？」

「……は？」

「『だ……だれ……!？』」

目の前に、知らん男子がおった。

「……え？　ちいと待って、だれ？　どこから来たの？　その服何？　つてい
うか今の光何!？」

「千代、落ち着いて、いや、うちも落ち着いとらんのじゃけど……。あんだ、
誰ですか……？」

うちゃ目の前に急に現れた人と、眩しすぎる光に困惑していて、立つことす
ら忘れとった。

「お前らこそだれだ……」

「君たち！　どうしたんじゃ？　しゃーなー（大丈夫か）？」

目の前に現れた男子の言葉を遮るように、知らん人がしゃがみ込んだるうち
らに声をかけてきた。見ると、周りにいる人もうちらのことを不思議そうに見
とった。どうしたんじゃって……。見たらわかるじゃろ……？

「いや、こ、この人が急に目の前に現れて……。」

「この人？　この人って誰のことを言いよるんだ？」

「は？」

この人、何言ってるの？ この男子のこと、見えてないの？

「おいおじさん、ふざけんな、どう考えても俺のことだろ…って、は…？」

「え…!?」

男子が、声かけてくれんかった人にいらおう（触ろう）としたら、なしてか触れとらんかった。貫通して、声かけてくれんかった人の背中から手が出た。どうなっとるの？

「あっ、そがいなことか？ いや、でも、げ（本当）にこんなんって…。」

「あ、文？ どしたん…？」

なぜか一人でぶつぶつ言ってる文。どうしたんじやろう？

「ご心配ありがとの。なんでもないけえ、気にしさんな。千代、あんたも、ちいとこっちに來て！」

「文!？」

うちゃ文に引っ張られた。あの男子はわけがわからんいうような顔でつつ立つた。なしてか、うちゃあの男子から離れてはいけんような気がして、動くのがちいと苦しかった。

「あんたも！ はよう！」

文に言われて、男子はようやく動いた。その途端、うちゃ苦しさがみてた（なくなった）。

着いていってしばらくすると、人がおらんどこに來た。

「はあっ、はあっ、」

長い距離を走ったけえ、息切れしてもうた。ほじゃが、一緒の距離を走ったはずの男子は全く息切れしとらんかった。

「あんた…なんで息切れしとらんの…化け物…？」

思うたことを口に出してしもうたうちに、向こうはカチンと來たのか、

「化け物ってなんだよ、初対面の人に失礼すぎるだろ？」

と言い返してきた。それが始まりで、うちと知らん男子の喧嘩が始まった。

「そりゃあ謝る、ごめん。ほんじゃがその口調も初対面なのに失礼じゃろ!?
ていうかさっきの人の体貫通しとったし、あんた何者? どっから来たわけ?」

「人のこと言えないだろ。お前の口調も十分悪いだろ! 俺だってなんで貫通したのかしらねえし、俺は…」

「はあ? なんで貫通したのか自分でもわからんってどがいなこと…」

「もう! 二人ともやめて!」

だんだん激しくなっていくこちらの喧嘩に、文が間に入ってくれて止めた。

「うちが、なんで貫通したのかわかったけえ、聞いて?」

その言葉で、こちらは動きを止めた。

「本当か!? わかるのか!」

「おおかた(多分)だけど、じゃよ…?」

自信なさそうに、文が衝撃的なことを言うた。

「あくまでうちの推測じゃけえわからんのじゃけど…。あんた、幽霊になったんじゃないと思う。」

「幽霊!」

息ぴったりの同じことを言うたこちらは互いを睨みつけ、すぐに視線を文に戻した。

「どういうことだよ、俺は死んでなんか…って、そうだ、俺は死んだんだ…。」

「え、本当なの…?」

信じられん話が本当の話になってきて、困惑した。すると男子は、黒くて四角い物体を取り出した。

「は? ちっ、充電切れてるし…。」

なしてか怒っている男子。あの物体は何…?

「な、何、それ……？」

うちが聞くと、男子は当たり前と言うふうに答えた。

「スマホだよ。わかんדר？」

「す、すまほ……？ 何それ？」

そがいな単語初めて聞いた。ほんじゃが男子は、うちらがすまほというものを知らんことに驚いてるようじゃった。

「は？」

しばらくの無言の後、男子が恐る恐るうちらに聞いてきた。

「お……おい、お前ら、今は、何年だ……？」

「え……？ 今は一九四五年の七月……。」

なんでそがいな当たり前なことを聞いてくるん？ 化け物じゃのうて、馬鹿なんじやろうか？

「やっぱり……！ 本当にこんなことがるのか……!?」

わかったというような顔をしとるが、うちらは何にもわからん。

「ちいと、一人で理解せんでうちらにも教えて……。」

「俺、きつとタイムスリップしたんだよ！」

「「タイムスリップ!？」」

ただでさえ困惑しとるうちに、またようわからん言葉を言うてきた。どがいなこと？

「俺が生きてた時代って、七十五年以上前の時代なんだよ。」

「七十五年以上前……!？」

「信じられへん……。」

頑張って理解しようとしとるうちの頭に、さらに男子は意味わからんことを言うてきた。

「スマホを知らねえんだろ？ 俺の生きてた時代では、スマホは誰でも知って

たし、学生は大体のやつが持ってた。それに服もお前らと全然違うし、今思えば、街並みも、俺が生きてた時代と全く違う。時代をワープしたとしか考えられねえんだよ。」

「何言いよるの…?」

全然理解できとらんうちの反対に、文はもう理解したようで、

「…つまり、あんたが死んで、それと同時に理由はわからんけど、違う時代に移動したってこと?」

「多分そうだ。」

「…なるほど。」

うちにもわかるように訳してくれんかった。

「お前、理解できてなかったのか…?」

「だ、だって、信じられん話すぎて頭が追いつかんかったんじゃないもん。しょうがないじゃろ?」

見下しとるように言われてむかつとなったうちや、言い返した。

「ばかだな。」

「はあ!? こがいなんで、すぐ理解できるものか!」

「こいつはできてたけど?」

「そりゃあ文がすごいだけで…」

「もう…また始まったよ…。」

すぐ喧嘩を始めたうちに、文は呆れとるようじゃった。

「もうええ。文、帰るよ。こんなやつに構っとる暇なんかない。」

文の手を取って、帰り道の方へと進む。

「こっちのセリフだ。」

男子はうちの反対方向に進む。

すると、

「うう…！」

く、苦しい…。どうやら、うちと男子が離れるとつまらん（だめな）ようじゃった。なんなの…？

「あんたら、一緒に生活しんさい。」

「こがいな口悪い人と一緒に生活するなんて、いやだ！」

「こっちのセリフだよ、ふざけんな。」

「でも、離れると苦しゅうなるんじやろ？そうするしかないよ。」

文の言うとおりじゃ。こちらは仕方の方、一緒に生活することになった。

突然現れた知らん男子と一緒にいる生活。最初の方はまだ慣れんかったものの、だんだんおるのが当たり前になってきた。ただ、大変なことが一つある。そりゃ、他の人にこいつが見えんことじゃ。例えば、こんなんがあった。名前は一色廉（いっしきれん）いうやつじゃった。うちの名前は一色千代（いっしきちよ）じゃけえ、苗字が一緒なことを言うとき

「お前と一緒になんて最悪だ。」

と言われ、喧嘩になりかけたが、お母ちゃんに

「あんた、何一人で喋りよるの？おかしゅうなった？」

と言われてしもうた。廉と喋りよると、変な人扱いされるんじや。それをええことに、廉はよううちに話しかけてくる。

「なあ、千代。俺って幽霊じゃん？」

「…。」

「どこまで飛べると思う？」

「…。」

「試してみてもいい？」

「はあ!? だめに決まっとるじやろ。うちは飛べんのじゃけえ、そんなんしたら…。」

「あんた、最近独り言激しいのお。体調でも悪い？」

「そんななんないよ、しゃーなー！」

「そう？　ならええけど。」

「もう！　話しかけんでよ！」

「お前、ばかだな〜！」

「なんじゃと！」

「ははははっ！」

ドキッ。なんじやろう。いつも笑わんで口が悪い廉が笑うと、変な感じになる。涉に言われたことを思い出す時と、似てるようで違う。廉が笑うた時の方が、もうちいと苦しくなるような…。お母ちゃんが言うように、体調でも悪いんじゃないか…？

そんなこんなで日は経ち、今日は八月五日。廉が来てから五日が経った。今日はたまたま仕事が早う終わったけえ、いつもより早う帰れた。家にやあうちと廉以外だあれもおらんかった。

「なあなあ廉？　なして廉はこの時代に来たんじゃないと思う？」

「そんなの知らね。でも帰りたくねえな。」

「そうなの？　この時代は大変じゃろ？　あんたの時代は楽そうじゃけえ羨ましいのお。」

「そんなことねえよ。こっちもこっちで面倒臭い。」

「そうなの？　聞かしてよ！」

未来の話に興味を示さんではいられなかった。うちやいつも廉に聞いた。た。

「俺の両親は、俺の行動にいつもいつも口出してくんだよ。もう一人じゃできないガキじゃないのによ。」

「そりゃあこっこの時代でも変わらんよ。うちのお母ちゃん見りやあわかるじ

やる？ 親っていうもなあどこの時代でも変わらんもんなんじゃのお。」

うちの言葉で廉は黙った。何か考えとるんじゃないだろうか？ 少ししてまた廉が口を開いた。

「いつも口出しされるたびにイラついて。反抗して。後悔してる。俺のためってわかってるのに、どうしても反抗心が勝っちゃうんだよな……。」

珍しくしゅんとしとる廉を見て笑いそうになったが、我慢した。

「まだわかつとるだけええんじゃない？ 親もわかつてくれとるじゃろ。廉がそうじゃったってこたあ、廉のお父ちゃんもお母ちゃんもそうだったんじゃない、きつと。」

「そうか……。でもさ、親に申し訳ないんだよな。反抗しちゃうことだけじゃなくてさ。」

「そうなの？」

「ああ。はあ、学校なんか、行きたくなえな……。。」

「何言いよるの！」

廉の言ったことに、うちや大きな声で否定した。なんでそんなを言うの？ 廉はびっくりしとった。

「学校に行きたくないやら言わんでよ！ うちらは学びとうても学べん。無理や指定されたお仕事をやるだけ。しかも、そりゃあ人を殺すための時だつてある。拒否したら、殴られて蹴られる。虐げられとる時代でそんな言うてほしゅうなかった！」

「じゃあどうすればいいんだよ！」

今度は、廉の大声にうちが驚く番じゃった。

「憧れの学校に行けたと思ったら、苗字が変、田舎生まれ田舎育ち、ってだけでいじめられた。あいつらの分のパンを自腹で買いに行つて。あいつらの宿題までやって。なのに、あいつらのサンドバックにされて、毎日ボロボロになつて帰る。そんなんされて羨ましいなんて言われてたまるかよ！ 俺だって、学びてえよ！ いろんなこと知りたい、人の役に立つために、いろんな知識を知りたい……。！」

廉がそがいな仕打ち受けとったなんて……。うちゃ想像もしてのうて、言葉が出なかった。

「一色、なんて変な苗字、選べれば選んでねえよ！ この最低な苗字のせいで、俺の学校生活はボロボロなんだよ！」

「…廉…。」

廉が大変なこたあよう伝わった。ぶち（とても）辛いじやろうな。ほんじやが、自分の名前を否定するなあ、違う気がする。

「…廉も大変じゃったんじやのお。辛かったじやろうね。ようわかったよ。

廉のその表情でようわかる。ほんじやが名前を否定するなあ違うじやろ？ せっかく代々受け継いで来た苗字を最低呼ばわりするなあおかしいよ。今、廉が言った言葉は、うちゃ他の一色さんをばかにする言葉じや。廉は、うちを傷つけるために言うたの？」

そのためじゃ無いってわかつとる。ほんじやが、廉に正気い取り戻してほしかった。最低な苗字じゃなんて、本当はそんなこと思うとらんはずじゃけえ。

「そんなつもりは、ない…。」

「じゃろ？ ならそんな言うたらつまらん（だめ）！ 一色なんて苗字、滅多に見んじやろうけど、じゃけえこそええじゃん！ うちゃ一色千代って名前ぶち好きなんよ。一色廉、なんて名前かつこそええじゃん！ ばかにしてくるやつなんて、ほっとけ！ 構うだけ時間の無駄じや。辛いじやろうけど、言える人に言うて、なんとかしてもらいな！ 絶対、廉の救世主はおる。じゃけえ、廉が好きだけ学んでほしい。学べん人の分まで、学んでほしい。廉ならできるよ！ うちゃ廉の味方じゃけえの！」

うちゃ思うとったことを全部廉に伝えた。伝わったじやろうか？ 廉を見ると、驚いた顔でうちを見よった。

「どしたん！」

「いや…。まるで、俺が元の時代に戻って生き返る、みたいな言い方だな、と思つて。」

「言われてみりゃあ確かにそうかも…？」

伝えるのに必死すぎて無意識じゃった。

「・・・でも戻りとうないって言うたなあ廉じゃろ？ それもまるで戻れる可能性がある言い方じゃない？」

「確かにな・・・。俺もまじで無意識だったわ・・・。なんでだろうな。戻れるような気がするんだよな・・・。」

「戻れる言うたってこたあ、戻りたいってことじゃろ？」

また廉が驚いた顔をした。廉の驚いた顔、好きじゃなあ・・・。

「よく気づいたな。そうだよ、戻れるなら戻りたい。」

「当たり前じゃ！」

文のあの恋愛話の時の言葉の勘が移ったんじゃないかな。うちも敏感になる。

「なあ、千代。」

「どしたん？」

「・・・ありがと。」

からかわれる思うたうちや、びっくりした。ほんじゃがそっぽ向いとる廉を見て、うちゃ笑った。

「照れとるの、廉？」

「う、うるせえ。」

「照れとるんだ！ 顔見してみ！ れ・・・」

「また独り言言いよる。あの子、変な子になっけしもうたんじゃろうか？」

「あ、お母ちゃん・・・!?」

廉のことをからかっけしめたらいつの間にか家族が帰って来とった。また変な子扱いされてしもうた・・・！

「変な子、変な子！」

「うっ・・・。せせろーしい（うるさい）！」

「ははははっ」

久しぶりに廉が笑うた。やっぱ笑うた顔を見ると、心が苦しゅうなるな…。

次の日の八月六日。土曜日のはずなのに、今日も千代や文たちは仕事だ。俺は、千代から離れられないから、仕方なくついていく。

「休みの日少ねえな。大変だな。」

「あんたの時代は休みあるの？」

「週に二回。」

「ええのお。」

そんなことを言いながら歩いていると、文に会った。

「千代、廉、おはよう！」

「文、おはよう！」

「おう。」

「ねえ、文、聞いて！ 廉の時代にゃあ、週に二回休みがあるんじゃない！」

「本当？ 羨ましいのお！」

「おい、今八時一四分だぜ。走れ！」

「嘘!？」

「大変じゃ！」

走り出した時。空から何か光るものが落ちているように見えた。

「なあ、あれって…。」

「廉が来た時の光に似とるよね…？」

「はあ？ まじ？」

俺は事故って死んだと思ったらこの時代にワープしたから、どうやって来たのか、全く知らない。

「廉、帰ってしまうの…?」

「俺が来た時と同じならそうかもな。千代、文、世話になった…」

言い切らないうちに、周りが光る。まだ、千代に伝えてないことがあるのに…!」

「千代…!」

だけど、光が強すぎて、俺は目を瞑らないではいられなかった。風もすごく強い。バーンと、大きい音も鳴っている。待てっ…!」

風が治り、光もなくなって、俺は目を開けた。俺はまだ広島にいたけど、今まで見ていた景色とは全く違った。

「な、なんだよ…これ…?」

建物は焼け焦げたり、なくなっていたり、崩れ落ちたり、ちゃんと建っている家はどこにもなかった。人は、頭にガラスが刺さっていたり、やけどの跡があったり大量の血を吐いていたり、皮膚がただれていて顔がわからなかったり、中には冷たくなって動かなくなっている人もいた。俺だけ無傷。当然だ、俺は幽霊なんだから物に当たらない。熱くも痛くもない。

「なんだこれ…。目を瞑ってたのって、一瞬だろ…?」

一秒も経っていないはずだ。何が起こった…

『原子爆弾』

困惑している俺の頭に、一つの単語がよぎった。

今は一九四五年。八月の六日。

場所は広島。

さっきの時間は八時十四分。

俺の母さんは広島生まれ。原爆が落とされた街で育ったから、原爆のことはたくさん聞かされていた。だから原爆のことは細かく、覚えている…!」

「ま、まさか…!」

どうして俺は気づかなかったんだ! 何年か聞いた時、気づいていれば…!

被爆者を少なくすることができたかもしれないのに……！

『げんしばくだんがおちると ひるがよるになって 人はお化けになる』

やめろ！

『ちちをかえせ ははをかえせ としよりをかえせ こどもをかえせ』

やめろ！

『わたしをかえせ わたしにつながるにんげんをかえせ』

やめろやめろ！

『にんげんの にんげんのよのあるかぎり くずれぬへいわを へいわをかえせ』

いやだ！

「水……」

「水を、くれ……」

やめろやめろやめろ！

「お母さあーん！」

「どこにおるの!? 返事して！」

「死にたくない……！」

「目を開けて！ お願いじゃけえいっぺんでもええけえ、目を、開けて……」

いやだいやだ！ やめろっ！

「廉……！」

「文!？」

名前を呼ばれて足元を見ると、文がいた。

「文……？ 足は……？ それに、腕、は……？」

「うちゃ、おおかた、もうすぐ、死ぬ……。」

「そんなこと言うな、文！ 大丈夫、大丈夫だ……！」

「なあ、廉……？ 千代のところ、行つて。」

「はあ？」

「千代は……吹き飛ばされて、あっちの……柱のほうにおる……。」

「文をおいてなんか……。」

「千代に伝えたいこと、伝えきれとらんのじゃろ……？」

「は……？」

女子は、どうして思つてることがわかるんだ？ もちろん伝えたいことはある。だけど、文を放置なんて、流石にできない……。

「行つて、廉……。心配せんでも……うちゃ、天国で幸せになる……。ただ……千代に、これだけ、伝えといて……。ぶち、大好きじゃつて……。……。」

「……文……？ 嘘だろ、文……？」

俺が呼びかけた時にはもう、文は帰らぬ人となつていた。目の前が、涙で霞む。

「文……最期の最後まで世話になつたな……。文の気持ち、千代に伝えといてやるからな……！」

俺は、文に感謝の気持ちを言つて、千代のところへ向かつた。少し離れてしまつたから、きつと苦しかったかもしれない。でも、それも氣にならないほど、千代は大怪我を負つていて、ボロボロになつていた。

「千代！」

「……廉……？」

閉じかけた目を開き、千代は俺を見てくれた。

「廉……無事、だつたんだね……よかった……。」

「当たり前だろ、俺は幽霊なんだから……。それより、千代が……！」

「うちゃ、もう……無理、かなあ……。おおかた、もうすぐ……死ぬ……。」

「……文から伝言。大好き、だつてき。」

「…そっかぁ…先に行つてしもうたんじゃのお、文…。でもしやーなー、もうすぐ行くよ…一人じゃ、ないよ…。」

「…一人じゃないだけ、まだだよ…。」

「廉…？ 泣きよるの…？」

「こんなのって、泣かないわけ、ないだろ…！」

涙を流している俺とは反対に、千代は力なく、ニコツと笑った。

「うちゃ、廉の笑うた顔が、好きなんよ…。じゃけえ、笑うて。おらんよ
う、なる前に、笑顔、見して…？」

「笑えるわけ、ないだろ…。」

もうすぐ死ぬ人が目の前にいて、笑える人なんて、いるものか…！

「なあ、廉…？ ちゃんと帰れても、うちが言うたこと、忘れんでね…。」

「忘れん！ 絶対忘れねえ！」

忘れてたまるか。一生忘れないでやる…！

俺から光が出始めた。きっと、戻れるのかな。

「千代、好きだ。好きだよ、千代！」

俺は思っていたことを素直に千代に伝えた。ぎこちなかったかもしれないけど、千代が好きだと言ってくれた笑顔を作った。力なく笑っていた千代は、驚いた顔をした。そして、千代は目に涙を溜めて、力なくではなく、にっこり笑って、答えてくれた。

「うちも、大好き…！」

そして、光が強くなって、千代が見えなくなった。戻れても、絶対に千代のこと、忘れねえからな…！

俺が次に目を開けた時、病院のベッドの上にいた。

「廉…！ 目を、覚ましたのね…！」

「よかった、廉…！」

「…母さん、父さん…。」

俺が目を開けた時、母さんと父さんはベッドの横にいて、起き上がった途端、涙を流して喜んでくれた。

「あなたが田んぼ道で車に跳ねられて意識不明の重症状態だって聞いた時、どんなに不安だったか…！」

「そっか、俺、車に跳ねられて…。」

「目を開けてくれてよかったよ、廉！」

次に目を開けた時、俺はタイムスリップしたことをすっかり忘れていた。いや、記憶から消されていた。でも、これでよかったんだと思う。覚えていたらきっと、ずっと泣いていただろうから。だけど、母さんの、泣いて喜んでる顔を見た時、なぜか誰の顔と重なった。だけど、誰なのか、永遠にわからない。

「母さん、父さん、今まで強く当たって、ごめんなさい。」

「あら、急にどうしたの、廉？」

「いいんだよ、俺も廉ぐらいの頃、暴れてたからなあ。」

「俺、さ…。不登校になったのには理由があって…。」

何があったのか覚えてないけど、何かあったのは確実にわかる。素直に、自分の気持ちを正直に打ち明けようという気になったからだ。それに、一色廉、という今まで嫌いだった名前が、今ではお気に入りの名前になった。それと、変わったことはもう一つあって…。

「…なあ、母さん。原爆のことについてさ、教えてくれねえ…？」

今まで全く興味なかった原爆に、興味を持つようになった俺は、母さんにしつこく原爆のことを聞くようになった。何があったのかは覚えていないし、思いつく限り聞いてみたい。ただ、いい方向に進んでいるんだろう。

原爆は、日本に深い傷を負わせた。たくさんの方が犠牲になった。被爆者の

方はまだいらっしゃるようだが、年が経つごとにだんだん減っていく。いなくなって、原爆の記憶がなくなるのは絶対に良くない。被爆者の方から記憶を継いでもらった俺たちが、なくならないために継いでいく必要がある。

俺は、俺をかえてくれた、名前もわからない人に、感謝の気持ちを忘れないよう、原爆の記憶がなくならないよう、生きていこうと思う。